
竜神の淵・天女の淵

あずみまつゆき

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

竜神の淵・天女の淵

【コード】

N3360C

【作者名】

あずみまつゆき

【あらすじ】

一年前、平五郎は隣の集落の源太に散弾銃を発砲し、死に至らしめた。執行猶予中、うすぼんやりとした霧の中をさまようような毎日が、うつろにすぎていく。そんなある日、現場にほど近い狩人の聖地《独鈷ノ淵》で、平五郎は女と老人に出会う。老人は竜の神と崇められ、女はどういうわけか、平五郎を源太の生まれ変わりとして信じて疑わない。昭和の寒村を舞台とした、罪と罰の葛藤を描くシリアストーリー。（7話完結）

平五郎は崖下を見おろした。ブナの森は朝もやに煙っている。

一年前、野田頭源太はこの崖をころげ落ちて死んだ。

ハイライトを口にくわえ、火をつける。水気をふくんだ落ち葉のにおいにタバコの煤がまじりあつて肺をひとめぐりすると、高まつた鼓動はいくらか落ち着いた。

東の空が明るんできたのは、つい今しがたのことだ。坂濠からおよそ二時間。この山に生まれ、猟師として育つた平五郎でなければ、未明の獣道を懐中電灯ひとつでここまで来るのはむずかしい。

薄暮の森に、野鳥のさえずりがひびきわたっていた。ウグイス、オオルリ、サンコウチョウ、ジュウイチ。おびただしい夏鳥の声はおりかさなり、清冽な音の洪水となつて静寂をおしながした。

(この声が、俺の心も洗ってくれればいい)

平五郎は不器用な頭で、このようなことを考えた。

ブナの幹でハイライトを消しつつ、ひよいと投げた。吸殻は優雅にひらひらと舞いおちて、ちょうど源太が倒れていた落ち葉だまりに着地した。

崖は急峻というほどではない。高さは五、六メートル。山歩きに慣れた者でなくても、注意すれば木の幹や岩をつたって、のぼりおろすことができる。

源太もまた、物心ついたところからこの山とともに生きている。崖をころげ落ちたのは不注意からではなく、平五郎の撃った散弾を被弾したためである。

《事故》から一年半。裁判はようやくひと段落ついた。判決を要約するところなる。

『N県S村坂濠地区の市澤平五郎は仲間と狩猟中、藪のむこうにいた同村川東地区の野田頭源太をイノシシと誤認し猟銃を発砲。散弾

もうひとつの理由は、平五郎の今いる場所から少し登ったあたりにある泉だった。《独鈷ノ淵ふち》と呼ばれるこの湧き水の泉は、坂濠川東はもとより、S村全域の狩猟者から崇敬を受けている。知られざる山の聖地なのである。この泉をどこかひとつの集落が独り占めすることはゆるされない。

平五郎と仲間が若者らしい気まぐれで、めずらしくこの場所で狩りをするようになった。そして事故がおきた。

禁猟期の五月。深夜に家を抜け出し、歩いてここまで来たのは、事件の現場をもう一度見たい欲求に駆られただけではない。

野田頭源太は青年団の団長をつとめたこともある、川東の男衆のリーダー格だった。それを殺した平五郎を、坂濠の若い衆は罪人どころか、敵将を討ち取った英雄のようにあおぎ見ている。

集落どうしの対立はそれほど根深い。

あわただしく不自由な、被疑者としての生活。執行猶予つきとはいえ、前科者としてのこの後の人生。三年間、猟銃を使えない暮らし。

人ひとり死なせたことに対する、平五郎の代償といえはこのくらいのものである。

無傷ではない。しかし。

心の中に重く薄暗いもやのようなものが残り、そのもやに導かれるようにして、ここに来た。

朝啼あしたなきがやむと、平五郎は崖下の吸殻から目を上げ、落ち葉と枯れ枝をふみしめて《独鈷ノ淵》へ向かった。

むかし、高名な修験者しゅげんじやがこの地で修行をしたおり、仏具の独鈷杵どくこしよを水の中につっかり落としてしまった。すると淵の底から竜神が顔を出し、独鈷杵を返してくれた。《独鈷ノ淵ふち》の名はこの言いつたえに由来する。

尾根が崩落するようにできた崖の下が、小広い平地になっている。ブナ林にとりかこまれたそのまんなか、二つに割れた巨大な花崗岩がずしりとあぐらをかき、その間から地下水がこんこんと湧きでてほそく流れ落ちていた。

清水の流れる先に、小さいが深い碧みどりの泉がある。これが《独鈷ノ淵》である。

泉は巨木の枝葉に陽光をさえぎられ、水面からたゆたう霧に薄暗くおおわれていた。

S村周辺の猟師ならだれでも、山の神が住むといわれるこの泉を知っている。しかし実際にここを訪れるものは少ない。実体をもった宗教的な聖地というよりは、狩人ひとりひとりに根づく、心の神のよりどころのような存在なのである。

平五郎がいま淵を訪れるのも、なにか目的があるというわけではない。事件の現場がたまたまここから近かったので、ふと立ち寄ろうと思ったまでである。しかしその気まぐれの深層に、山の霊がすまう聖域を血で穢けがしたうしろめたさがまったくなかったとは言いきれない。

しげみを分け入るうち、平五郎は先客がいることを察した。獣ではない。人間の声がかきこえる。それも、女だ。

(こんな時間、こんな場所に、誰が?)

夜明けの二時間まえ、平五郎はまっ暗な山道を歩いてきた。

ブツブツとつぶやくような、うなるような声が大きくなってくる。平五郎は狩猟の習慣で気配を消すと、大樹の幹にかくれて淵のよう

すをつかがった。

女はまるはだかだった。泉に膝までつかり、こちらに背を向けて立っていた。

むこうに割れた巨岩がそびえている。右側の岩の上が半畳ほど平らになっていて、その上に老人が結跏趺坐けっかふざし、泉の女を見おろしていた。

女は巨石の上の老人にむかって、しきりに祈りをささげている。

老人の顔に見覚えはない。ぼろきれ同然となった浴衣ゆかたのようなものを身体にまきつけている。顔や手足も垢あかで真っ黒だった。まともな生活をしている者には思われない。

女の顔は確認できないが、すくなくとも坂濠の者ではない。衣は淵のわきにたたんで積んであるので、ここまでの山道を全裸で来たわけではないらしい。年のころは二〇代のなかばといったところ。

背中から尻への肌は白く、輪郭の曲線はまるくしなやかだった。濡れた黒髪が背筋にたれている。

「りゅうじんさま、りゅうじんさま、どうか……を……ください」
両腕をあわせて老人にむけてこすりあわせ、腰を不器用にくねらせている。ひどく滑稽なおどりに見えた。

老人を『りゅうじんさま』と呼んでいる。

女がなにをどうしてくださいと言っているのかを聞きとろうとして身をのりだした拍子に、しげみをガサリとゆらしてしまった。これが狩猟なら、獲物を一頭のがしている。

老人が気づき、それから女がふりかえった。

平五郎は逃げるかとどまるか逡巡しゆじゆんした。相手がただの女と老人ならば、なにも危険なことはない。だがこのような早朝の山奥である。妖怪や幽霊など信じてはいないが、すでに日がさしているとはいえ、目の前の光景はじゅうぶん不気味であった。

こちらを向いた女はのつぺりした顔つきだが、どちらかといえば美人のたぐいだった。乳房や脚のあいだを隠そうともせず、猫背で平五郎を凝視した。

「りゅうじんさま、これがげんたさんか？」

女は平五郎から目をはなさず、甲高い声で背後の老人にたずねた。このあたりの訛りだった。

老人はまぶたをすがめて平五郎を見ていたが、女の言葉に合点がいったように目を見開いた。

「そうだ。あれはげんたのかわり。いのりはつつじた。ここでむかえる」

平五郎はブナの幹から半身を乗りだし、茂みに左手をついた姿勢でかたまっていた。

(げんたのかわり?)

女の言葉が脳裏をかけめぐるうちに、女のほうは安心しきった満面の笑みで、はだかのままこちらへ歩み寄ってきた。

「げんたさん、げんたさん」

つんのめった平五郎に手をさしのべた。男はその手をとって、よく立ち上がった。

「ひさしぶりだね」

親愛の笑みにまったく覚えはない。

平五郎が抵抗できないのは、山中で出会った女に蠱惑こむくされただけではない。この女が自分を《げんた》と呼んでいるからだ。

げんた、源太、野田頭源太。一年まえ、平五郎が死なせた男。

女は平五郎の着ふるした狩獵衣を一枚一枚脱がせながら、一歩ずつ、淵のほとりへいざなつた。

「あいたかつたよう」

甘えた泣き声をもらしつつ、はだかになった男の首に巻きついた淵のへりには、あつらえたように平らかな花崗岩が横たわっている。

老人が黙して見下ろすなか、平五郎は女を抱いた。

(この女は、天女にちがいない。おれの罪を赦すために降りてきたのだ)

男はとりとめもなく、そんなことを思った。

ことが済むと、女はみえという名を告げた。

「いやだ、忘れちゃったの」

身体の下で甘えた声をだした。

女は自分のことを源太と思いこんでいる。正しくは、源太の《身代わり》か《生まれ変わり》のようなものと信じている。

気がふれていることにまちがいはない。しかし女におかしな妄信をうえつけているのは、ことの一部始終を見守っている、岩の上の老人のようだった。

老人に誰何^{すいか}するような余裕は、今の平五郎にはない。

ウグイスの声にふと我に返ると、男はあたりに散らかった狩獵衣をそそくさと身にとりつけ、女の呼び止める声を背中に、まっすぐ山を下りた。

女はもちろん、天女ではなかった。

のたがしらげんた

野田頭源太のもと妻である。一七で嫁いだが、三年たつても子供がでなかつたため離縁され、家にもどつた。

みえの実家は戦中まで小作農で、いまは農地改革で手に入れた猫の額ほどの土地を耕して生きている。父は数年前に死に、腰のまがつた母がひとり残っていた。

不妊で離縁された女に、ふたたび嫁ぐさきはなかつた。老母との心細い生計をおぎなうため、村の若い男に操みまおを売っている。

このような黙認の娼婦はS村に何人かいて、ふつうは近隣の集落にも知られている。平五郎が知らなかつたのは、みえが川東の女だからである。

山をおりて数日後、狩り仲間で事情通の実吉さねきちにみえという名をそれとなくたずねてみると、こうした答えがすらすら返ってきた。

実吉は事件のオりの狩猟チームの一員である。平五郎が源太に発砲したとき、メンバーは全員少し離れた別の場所にいた。銃声を聞きつけ、最初に駆けつけたのは実吉である。気の昂ぶつた平五郎をなだめ、いっしょに源太を崖下からひきあげたが、そのときすでに源太は虫の息だった。

猫背の小男だが、目はしがきき、面倒見もよいので、坂濠での人望は厚い。平五郎とは幼少のころからうまが合い、大柄で無骨な平五郎の相方をよくつとめている。平五郎は十代のころ、無口で不器用な性格がもとで、よく集落内外の同世代と衝突した。殴り合いの喧嘩もよくあることだったが、この実吉が裏からうまく手を回して、ことを円満におさめることも少なくなかつた。

「それで、その女がどうした？」

実吉はげんそうに質問をかえした。

「いや」

平五郎は言葉をにごした。相手が親友であつても、先日のできごとを話すつもりはない。

実吉はしばし首をかしげて平五郎をみつめていたが、やがてひとり納得がいったようにうなずき、似合わない優しい笑みをむけた。「言いたくないなら、いい。だが」

真顔になり、平五郎の瞳の奥を見すえる。

「去年のことは、もう忘れる。あれは事故だ。おまえは悪くねえ。坂濠のもんはみんなわかつてる」

死なせた男の別れた妻を気にかける平五郎の心中に同情をよせている。しかし平五郎はあいまいな視線で流した。

「おまえは、みえを見たことはあるのか」

平五郎はたずねた。実吉はとんでもないというように首をふつた。「川東になんか、おいそれと立ち入れるもんじゃねえ」

「そうだな」

川をはさんでとなりあう坂濠さかこうと川東かわひがしだが、おたがいの出入りはほとんどない。むやみに立ち入ろうものなら、袋叩きにされてしまう。源太が死んでからこのかた、川東の若者たちはますます血の気が多くなっている。

実吉は話題を変えた。

「そんなことより平五郎、この間の話だがな」

「ああ、青年団の」

「どうだ？ やつてくれないか」

「おれの話なんか、誰が聞きたがるもんか」

「みんなが聞きたがつてる。年寄り衆もみんなだ」

青年団の次の集会で、平五郎の演説を聞きたいという声があがっていた。実吉が平五郎をたずねているのもこちらが本題である。平五郎はここ一月、返事を先のばしにしていた。

「おれは執行猶予中だ。犯罪者なんだ。そんなやつがみんなのまえでえらそうに話すなんて、おかしいだろう」

できることなら演説などしたくはない。それが平五郎の本音であ

る。

実吉はしばらくうつむいて沈黙したが、表情を曇らせてこう切り出した。

「弘と庄三が、東京に行くと言いだしてる」

「そうか。みんな都会に出たいんだな」

平五郎はうつむいて返事をした。

「呑気なこと言っつな。なんとか引き止めないといかんだろう」

「なぜだ？」

平五郎の素朴な問いに、実吉は困り果てた顔でため息をついた。

「おまえは変わった。前なら何も言わなくても、二人を止めにはいつていた」

終戦から一〇年あまり。特需景気から高度成長、世の中は急速な変貌を遂げている。

しかし成長しているのは都市であり、農村ではなかった。鉄道の通らないこの山間の村は、肥大をつづける都市に食いつぶされようとしている。

「いま、若いやつが村を出てしまったら、県との戦いがますます不利になる。それくらい、おまえにもわかるだろう」

平五郎は無表情でうなずいた。

坂濠は県の行政と対立していた。争点は多目的ダム建設。計画が実行されれば、集落の大部分がダム湖の底に沈む。青年団の集会で平五郎が求められている演説の内容も、ダム建設反対にかける村人の士気を鼓舞するためのものだ。

実吉は熱っぽく続けた。

「人を減らすわけにはいかない。事件からこっち、おまえは坂濠の若者衆から尊敬されてる。おまえから言っつてやれば、弘も庄三も考えを変えるにちがいないんだ」

「だが、俺が演説したなんて川東に知れたら」

「知れたら、なんだっつていうんだ？」

実吉の声色が変わった。

「湖に沈むのは川東もおなじだ。県の行政を相手にするなら、川東も味方に」

平五郎の主張は、実吉の怒気をはらんだ言葉にさえぎられた。

「川東と組むなんて、どうしたらそんなこと思いつく？ よりにもよって、おまえが」

「だが」

「もういい。講演のこと、またゆっくり考えてみてくれ」

実吉は立ちあがり、出ていった。

平五郎はため息をついて、土間の勝手口をうつろにながめた。

すりきれた畳にあぐらをかく。ここは平五郎の家である。

兄が二人、姉が一人。それに弟が二人。平五郎は名のとおり五男で、それ以外にも二人の兄がいたが、流行り病はやりですでにこの世にいない。

次兄は大阪の工場で働いている。姉は坂濠の男に嫁いだ。祖父母はもういない。

村がダムに沈めば、一族でどこかへ移住しなければならぬ。行政は補償金を出すと知っているから、県内に畑を買うこともできるかもしれないが、おそらく次兄のいる大阪や名古屋のような都会に出ることになる。

生まれてこのかた村を出たことのない両親には、考えられないことだろう。畑をついだ兄夫婦や、村の男に嫁いだ姉にしても、同じことだ。

村がなくなるとなれば、意識したことのないなかつた郷土愛ももたげてくる。平五郎とて、心中穏やかなわけはない。

ダムの話がもちあがった二年まえには、平五郎は集落の若い衆の先陣をきっていた。長老格と話し合い、反対運動の中心で働いていた。

実吉の言葉を借りれば、いまの平五郎はまるで抜け殻ぬである。

（執行猶予の期間がすぎたら、いつそ村をでようか）

こんなことを漠然と考えてさえいた。平五郎も土地を継承する立

場にはない。どこかへ婿養子に出るのでもない限り、いずれは生活のすべを考えなければならぬ。

しかし村を出て、それで何になるだろう。平五郎は前科者である。この村でなら赦されても、大きな街でこの前歴がどれほどの重みをもつかということくらいは知っているつもりだ。

ダムができれば、畑も消える。いずれにせよ、ここにはいられない。坂濠も川東もなくなる。

平五郎の前科だけを残して、すべてが水底に沈む。

それは怖いようでいて、さっぱりするような気もする。

ここ一年、ろくに働かなくなった平五郎を、家の者は遠巻きに見守っている。坂濠の若者の尊敬を集めていたとしても、人生を大きく狂わせたことに違いはない。

平五郎をとりまくまなざしは温かいが、戸惑いと不安を含んでもいる。

日が暮れようとしていた。平五郎は夕食をとり、いつもより早く寝床についた。

四

「山菜を摘んでくる」

家の者にはそう伝えて、平五郎は山に入った。夜半をすぎたころである。

午前二時。《独鈷ノ淵》^{とくとく}_{ふち}の夜はまだ明けておらず、水辺にみえは
いなかった。

ひんやりした花崗岩に身を横たえた。懐中電灯を消すと、木々の
枝葉の隙間から月の光がもれて、幾条かの白い筋をつくった。

寒い。平五郎は目を閉じた。少し眠ろうと思った。

「あの女なら、もうじきここに来る」

平五郎はぎよつとして身をおこした。不意の声だった。

見ると、清水のわきだす巨岩に老人が鎮座している。みえが《竜
神さま》と呼んでいた老人である。

平五郎は岩の上に片膝をつき、油断のない姿勢で相手を見すえた。
(さつきまでは、確かにいなかった)

この静かな夜に、気配なく近くまで寄られたことが不気味だった。
月は老人の背後から照りつけている。こちらからは逆光だが、む
こうからは平五郎のひきつった口元まで見てとれるだろう。

平五郎は手もとの懐中電灯を入れて老人にむけた。これで《見る・
見られる》の関係は逆転する。

「このへんでは見ないじいさんだな。だれだ？」

誰何^{すいか}したあと、懐中電灯をすばやく八方にむけ、ほかに人がいな
いことを確かめた。

老人は峻厳なおもちをくずすことなく、こちらをまっすぐに見
おろしていた。やがてきしむような声でこたえた。

「何者でもない。この山にすんでいる」

「みえに竜神とかなんとか、呼ばれていたな」

「あの女が勝手に呼んでいるだけだ」

「じゃあ、名前は？」

「名前はない」

平五郎はしばらく黙った。

（ぶざけたじじいだ）

名前を聞いたところで、何にもならないことは分かっている。

（山に住んでいる？　ありえない。この山中で老人がひとり、冬を越せるはずはない）

修験者しゅげんしゃなのかもしれないと、平五郎は思った。それなら、竜神などと呼ばれていることも納得できる。どこかの乞食坊主がこの淵で修行をしているのではないか。

（岩から引きずりおろして尋問しようか）

一瞬、そんな思いがよぎった。しかしその気にはならなかった。

自分とみえとの交合こうごうを見まもった老人である。竜神などとは思っていないが、得体おとせの知れない畏れのような感覚を平五郎もいだいている。事実、このような夜中に突然現れたのだ。

それにもえがもうすぐここに来るとすれば、彼女が崇あがめたてまつっているこの老人を乱暴にあつかうのは気がひけた。

なんにせよ、みえが平五郎を源太と勘違いしているのは、この老人の《導き》のおかげなのである。

大きな謎のひとつは、その点だった。

「どうしておれが源太の《代わり》なんだ？　あんた、おれが誰だか知ってるのか」

老人の口元が奇妙にゆがんだ。

「おまえは源太を殺した」

はつきりとした声で、こう言った。平五郎の脳裏を冷たいものが走った。

老人は続けた。

「源太の代わりと言ったのは、あの女がそれをもとめていたからだ。おまえのほうは、あの女が何者か知っているのか」

平五郎はうなずいた。

野田頭源太の妻だった女だ。離縁されてから気が狂い、老母のもとで村人に春を売って生活している女。

「女の求めているものも、おまえと同じ。おまえたちは、似合いだ」「なんだと」

老人は口のはしをにいとひらいて、いやらしく笑った。電灯の黄色い光に照らされ、白目がぎらぎら輝いた。

高山の夜は初夏であつても凍えるように寒い。老人を冷静に分析しようとする心が、いつしか恐怖と狼狽に染まっていた。

疑問が最初の一点にもどつた。さきほどと同じ問いであることに、平五郎は気づいていない。

「みえはあんたを竜神と呼んでいた。なぜだ」

「勝手にそう呼んだのだ。あとは女に聞くがいい」

そのとき、下生えを踏みしめるかすかな音が耳に伝わってきた。

「源太さんかい？」

みえは現れるなり、平五郎にかけよつた。着古したモンペ姿。家事の途中でフラリと出てきたのにちがいない。

割れた巨石からわきだす水が、ほそい音をたてて淵に流れこむ。

水面は森の闇を吸いこんで、黒く底光っている。

みえの目に《竜神さま》は映つたのだろうか。まっすぐ平五郎に抱きつくと、やわらかな腕を首に巻きつけた。

「このまえは、どうしたの。いきなり行つてしまつたもの」

悩ましい声を漏らした。からみながら、たがいの衣服をはぎとつていく。夜気が素肌を刺した。

「すまない、みえ。ゆるしてくれ」

「ゆるすもなにも、ないよう。もう、どこにも行かないで」

平五郎が懐中電灯のスイッチを落とす。老人の笑いは逆光のかけに消えた。

二人は身を重ねた。

鳥の朝啼あさなひきがはじまる夜明けまではまだ間があつた。

五

逢引はそれからも、四、五日に一度の頻度で続いた。

男に結婚の話はない。もっと若いころ、ひそかに逢瀬をかさねた女もいたが、その女がよその村に嫁いでしまつてひさしい。二四の独り者だつた。

平五郎が夜中に家をぬけ出し、山奥に消えていくことを知っているのは家の者だけである。ときおり自分に向けられるいぶかしげなまなざしを感じたが、平五郎は気づかぬふりをしてやりすごした。

山に入るときにはいつも「山菜採り」と言い、実際、きのこやぜんまいをいくらか摘んで帰つた。沢で魚を釣りあげることもある。嘘の言いわけとしては拙劣すぎるということくらい百も承知だったが、どうでもよかつた。

みえの態度ははじめのときから変わりなかつた。平五郎のことを源太と呼び、三年の夫婦生活でつちかつたものなのか、甘くなれなれしい態度で平五郎の分厚い胸にもたれてくる。

ただ、言葉のはしばしから明らかになる事実もあつた。みえと源太は離縁してからも、ひそかにこの淵で定期的に逢い、身体をかさねていたのだ。

事件のなかで、最後まで明らかにされなかつた謎がひとつあつた。なぜ源太は淵の周辺をひとり歩いてきたのかという点である。

裁判が平五郎に有利に進んだ一因でもある。その秘密が明らかとなつた。源太はみえと会うために淵へ来ていたのだ。

おそらく二人の離縁を決めたのは源太の家の者で、当の源太はみえを愛しつづけていたのだらう。

「源太さん、今日はおにぎりがあるよ」

月光の下、屈託くつたくのないのっぺりした白い笑顔を平五郎に向けた。

（男に体を売つて生計の足しにしているというが、どのくらい客をとっているのだらうか？）

平五郎は最近、そんなことが気になりだしている。

「竜神さまにも、ほら。お食べになつてください」

米だけの握り飯を老人の座る巨石のすみに置く。この老人もいつも同じ場所において、平五郎とみえの営みを飽きもせずじっと見守っている。

はじめのうちは気になっていた平五郎だが、老人が害をなさないとわかると、しだいに何も感じなくなつていった。どこかの呆けた老人か修験僧しゅげんそうでなければ、みえの言つとおり山の神なのかもしれないと、いささか投げやりに思い始めてもいる。

山に入り、女を抱く。それも、自分が死なせた男の妻だった女と。浮いた話のない平五郎にとって、性の充足は近頃の宙に浮いたような生活の慰めになる。

しかし、みえとの関係はそれだけではない。

源太は死んだとき、独身であつた。みえと離縁してから再婚しなかつたのである。三年子供ができないというだけで、一度親族に迎えた女を放り出すような一族なら、新しい妻をどこぞから準備していたにちがいない。源太はおそらく、その女との結婚をかたくなに拒んだのだ。

みえと復縁するため、親を説得しようとしたかもしれない。しかし願いはかなわぬまま、源太は命を失つた。

いま、平五郎は源太の《代わり》として山に入り、源太と呼ばれ、源太として愛されている。

愛されるたびに、罪の重さを思い知らされる。

(源太を死なせた罪に対する、これが罰なのではないか)

平五郎はこんなふうにはじめていた。

六月も終わりに近い。平五郎はいつものように、淵のへりの岩に身を横たえ、みえを待っていた。から梅雨の夜空には星が光っている。

ぼろをまとつた老人はあいかわらず、巨石の上に鎮座していた。

「なあ、《竜神》さんよ」

平五郎はハイライトの煙をゆっくり吐きながら言った。
返事をしない老人に、平五郎は続けた。

「おれたちのこと、どう思ってる」

「どう、とは、どういうことだ」

老人は問いを返した。

「おかしいとは思わないのか？ おれとみえがこんなふうになっ
ていることが」

一呼吸おいてから、老人はゆっくりと答えた。

「おまえたちは、たがいを必要としている」

「みえにおれは必要なのか」

「あの女にとって、おまえはたった一つの光明だ」

聞くまでもない。よくよく了解していた。平五郎がほんとうにき
きたかったのは、それとは逆のことだ。

「おれにとつても、みえは必要なのか」

自問のつもりで、口にしてみた。源太として愛されることが、平
五郎にとって罰以上の何かだろうか。

「みえがおまえを必要としているよりも、おまえはみえを必要とし
ている。おまえがいちばん必要としているものを、あの女はもって
いるからだ」

平五郎はタバコを口にくわえたまま老人を見た。逆光のため表情
は読みとれない。

（このじじい、てきとうなことを言っている）

老人の言葉を頭から追い出そうとして、口をすぼめて強く煙を吐
きだした。

「認めたくはないだろう。だがおまえがここに来るのは、ただ女を
抱きたいからではあるまい」

ジュツ、と音がした。平五郎がタバコを淵に放りこんで消したの
である。

起きあがり、あぐらをかいた。

「みえの何が、おれに必要なんだ。言ってみろ」

「……」

「なんだと？」

茂みを分け入るガサガサという音が問答をたち切ったので、老人の一言を平五郎は聞きとりそこねた。

「みえか。待ったぞ」

平五郎は立ち上がり、ふり返った。瞬間、閃く白刃が目に飛び込んできて、平五郎はからくも身をかわした。

みえは勢いを止められず、淵のなかに足を踏みいれて転倒し、全身ずぶぬれになった。立ちあがり向きなおったみえは出刃包丁を両手にしっかたにぎり、男に相対した。

平五郎はブナの幹を背に立ち、目を見ひらいた。

長い黒髪から淵の水がとめどなくしたたり、そのしずくのひとつひとつが銀光を照りかえした。まるで親の仇のように、こちらをにらみすえている。平五郎はすべてを理解した。

親ではない、夫の仇なのだ。

「よくも源太さんを！ 源太さんを返せ」

どこで、どうやって知ったのか。それとも正気に戻ったのか。わからない。

やみくもな女の突進をかわすことは容易だったが、平五郎はおそろしかった。

（おれはここで、みえに刺し殺されるべきだ）

心の一隅に、こんな思いがわだかまっている。いつか、この思いに敗れる日がきそうな気がする。それがなにより怖かった。

平五郎は山を下りた。

「人殺し！ 源太さんを返せ」

みえの甲高い怒声が背中を追いかけてくる。

どこまでも追いかけてくるので妙だと思ったら、いつのまにか、みえの声は幻聴になっていた。

六

山の風が夏の暑気をはらんできた。

《独鈷ノ淵》からほど近い谷にぽっかりと口をあけている洞穴を、平五郎はのぞき見た。子供のころ、実吉ら遊び仲間と連れそって、ここで夜を明かしたことがある。

新しい人間の足跡が出入りしている。穴のまえには焚き火の燃えさし。

平五郎は身をかがめ、一步を踏み入れた。

ぼろぎれのようになった毛布は、どこから調達したものだろう。すえた匂いのするこの洞穴は《竜神》のねぐらにちがいない。

岩肌にかこまれた二畳ほどの空間は、昼間でも日のささない暗がりである。奥は平たい花崗岩が棚のようなかたちで一段あがついて、その上に木綿の衣服が丁寧に折りたたまれていた。軍服だった。上着の裏地に名前が刺繍されている。曾根桃吉、階級は兵長。

平五郎は軍服の上着だけを右脇にかかえて穴ぐらを出た。《竜神》の正体をあばいた喜びはなかった。

桃吉の名を口にしても、老人はさして狼狽するようすはなかった。あいかわらず岩上に結跏趺坐して平五郎を見おろしている。ひからびた腕を静かにさしだし、上着を返すよう求めてきた。平五郎は一瞬戸惑ったが、言われるままにした。

真昼の淵にウグイスのさえずりが響いてくる。

「戦争は一〇年以上前に終わっている」
確認するように平五郎は言った。

「おまえの殺しは、もう終わったとでもいうのか。わしの戦争はまだ終わってはおらん」

桃吉は平五郎をおだやかに見つめてこう返した。桃吉は問わずがたりをはじめた。

「慶良間に配属されたのは終戦間近のことだった。沖縄はつぎつぎに占領されていった。」

徹底抗戦のため離島の住民を組織するよう命令された。ある離島に上陸したとき、わしは海岸で小艇の見張りをすることになった。わしは死ぬのだと思った。海辺で一人になった。気がついたら、ひとりで小艇に乗り島を抜けだしていた」

平五郎は戦時中、兵役につくには若すぎた。戦後の反戦教育の洗礼を受けた最初の世代なので、軍隊のことはよく知らない。老人は続けた。

「不思議なことに、追っ手はかからなかった。ずっとあとで知ったことだが、慶良間はそれからすぐに陥落し、脱走兵ひとりにかかずらわっている暇はなかったのだ。」

わしは食糧もなく、水もないまま海をさまよった。

どれほど海の上にはいたのかはおぼえていない。たどりついたのは無人島だった。わしはそこで何ヶ月ものあいだ、ひとりで暮らした。わしは自分の犯した罪について、ずっと考えていた。仲間を捨てて逃げ、生き恥をさらしている自分を見つめた。何度も自決しようと思ったが、できなかった。自決などで赦される罪ではないように思えたのだ。

島を出た。日本人につかまって軍法会議で処刑されるか、アメリカ兵と遭遇して玉砕するか。このどちらかでしか、罪はぬぐえないと思った。

流れついたのは鹿児島沖の小島だった。そこでわしは、戦争がすでに終わったことを知らされた。わしを銃殺する日本軍も、わしと戦う敵兵も、なくなっていた」

老人はうつむいて深く息をついた。

「軍籍では、わしは戦死ということになっていることだろう。わしという人間は根こそぎ消し去られてしまったのだ。だがわしはここにおる。おかした罪も、わしと一緒にずっとある」

顔をあげた桃吉は平五郎に微笑みかけた。平五郎は身震いした。

「三年まえまで、東京で物乞いをしていた。山に入ったのは一昨年おとしからだ。冬のあいだは街へおりる。

わしは償あがなえぬ罪をつくなうためだけに生きているのだ。おまえと同じようにな」

「おれと、同じように？」

平五郎はおうむ返しにたずねた。

さつきから気にかかっていた。この老人はまるで、平五郎がまるで旧知の友でもあるかのように、気さくに、うちとけて話をする。

「どうしておまえがここに来たのか、よくわかるぞ。わしの弱みをにぎって、させたいことがあるのだろう」

老人の細い目が平五郎を刺した。そのとおりだった。

桃吉は見ぬいていた。みえが竜神とあおぐこの老人を使って、みえの心をもういちど、平五郎にそわせようとしていることを。

「明日の朝にここへ来るがいい。みえも来るはずだ。

村でとつた客が、たまたまおまえの映った写真を持っていたらしい。源太を殺した男だと教えられたそうだ。

みえにはよく言っている。源太を殺した悪い男の魂は、わしがこの淵の底へ沈めた。いまの平五郎には、命をおとした源太の魂が宿っているとな」

「ほんとうか」

平五郎は詰めよるようにたずねた。

「わしは去年も一昨年も、源太とみえのここでの逢引を茂みのおかげからのぞき見しておつたのだよ。

源太とみえの名前も、二人の話を聞いていたから知っていた。気づかれてはいなかったがな。

わしは陸軍の訓練を受けた。森で気配を殺すことにかけては、おまえたち狩人に負けん。

みえと顔を合わせたのは、今年になってこの山に登ってからのことだ。

みえはこの淵で一心に祈りをささげていた。わしをみつめて、淵

の底にすむという竜神と思い込んだ。

「いずれ源太のかわりが現れるだろうと言ってやると、みえは喜んでそれを信じた。」

みえはちよくちよく淵に現れては、このわしに祈るようになった。信じて祈ることがみえにとつての救いならば、それを聞きとどけてやるのも情けだろう。その見返りとして、わしは若い女子おんなの肌を見ることができるとだ。

ゆくゆくはわしに源太の魂が乗りうつったとでも言つて、みえにふれてやろうと思つていたところに、おまえが現れた。

あの女はわしを神と信じてうたがつていない。みえの目には、もうおまえは平五郎ではなく源太そのものだ」

老人はほがらかに笑つた。

平五郎は口を閉じた。

源太を死なせた罪を、坂濠の人々は赦した。しかし平五郎自身はどうか。自分の罪を、平五郎は赦せているだろうか。

子を授からないというだけの理由で離縁されたみえは、むしろ悲惨な被害者だ。しかしみえの心のなかではどうか。愛する夫の期待に添えなかつたみえもまた、だれも裁けないからこそ、だれにも赦すことができない罪を心の奥底に背負いこんでいるのではないのか。罪はみずから赦さぬかぎり、罪を犯した者の心の中に、消えずに残りつづける。

この世界のだれも、平五郎のほんとうの罪を知らない。みえの心の罪を知らない。この老人をのぞいては。

桃吉はみずから赦すことができない二人の罪を、《赦せない》という事実ごと受け入れ、知つてくれている。

（おれからこの老人に、なにかしてやれることはないのか？）

平五郎はふと、そんなことを思つた。

しかしそんな考えはすぐに消えた。老人はただ、自分たちのことを知つてくれているだけだ。桃吉は幸福そつに昔語りを楽しんだ。それで充分ではないのか。

老人の笑顔に、平五郎はこたえた。ひさしぶりに晴れ晴れと笑えたような気がした。

山を下りようと振りかえったとき、平五郎の脳裏にひとつ疑問がよぎった。

向きなおつて訊いた。

「おれが源太を死なせたことを、どうして知っている？」

桃吉ははじめて、意外そうな顔をした。

「見ていた。気づいていなかったのか」

平五郎の顔から血の気がひいた。

「いつものように、源太がみえを待っているところに、おまえが現れた。」

源太がちよっかいをかけたな。源太はおまえを追いはらって、だれにも知られずみえを迎えるつもりだったのだ。

しかしおまえは銃をむけて反抗した。源太は挑発をつづけた。おまえは撃った。

はじめから終わりまで、わしはしげみの影からみておったよ」

目のまえがくらくらした。現場を見ていた者がいる。この老人が「裁判ではおまえは源太をイノシシとまちがえて撃ったことになっているらしいな。」

さいわい、仲間は近くにいなかった。殺した瞬間をだれも見っていない。運がよかったな」

言い終えるのを待たず、平五郎は老人の胸ぐらをつかまえて巨石から引きずりおろした。

下ばえに押さえつけ、顔面を思いきり殴りつけた。一発、二発、

三発。

衰えた老人の命を奪うのに、たいした労力はかからなかった。

「あんたの罪を、消した」

立ちあがり、ぼろのような老人の死体を見おろして言った。

桃吉は自分の罪を知ってくれていた。

だが、すこし知りすぎていた。

平五郎はいちど山を下り、縄をたずさえてすぐに戻ってきた。死
体を手ごろな岩といっしょに毛布に巻きつけ、深い碧みどりの淵の底へ沈
めた。

「これで桃吉はほんとうの竜神になった」

平五郎はひとりごとを言った。

七

「冗談じゃねえ。坂濠さかこうの人殺しに、うちのだいじな娘をやれるか」
老婆のかすれた怒声とともに、火箸や盆が飛んできた。

みえは平五郎のまえに立ち、話を聞くよう哀願したが、女の母は聞く耳をもたなかった。

「みえ、出戻ってきたかと思えば、よりによって坂濠の男となんかくつついたか、あばずれの親不孝め」

ありつたけの口汚い言葉で娘を罵倒すると、老婆は娘ごと、平五郎を家から追いだした。

平五郎は川東にいる。みえの母に、みえを嫁にもらうための挨拶におとずれたのである。しかし結果は思ったとおりだった。

「ごめんよう。おかあは、いつもあんなだから」
みえがさがるようにわびた。

「でも、きつとおかあもわかってくれる。あんたは坂濠の平五郎なんかじゃねえ。源太さんの生まれ変わりなんだ。源太さんがわしをもう一度、嫁にもらいに来てくれたってわかれば、おかあの考えも変わるにちげえねえんだ」

出なおさなければなるまい。平五郎はみえを連れて家に帰ることにした。

坂濠への細い道を歩く二人の背後から石つぶてが飛んできて、平五郎の背中にあたった。平五郎はうずくまった。

「うちの淫売によそ者の客がついたと思ったら、坂濠の平五郎でねえか。その女がだれの嫁だったのか、知ってるのか」

川東の若者が五人、みえと平五郎とをとりかこんだ。

「この女はうちの集落のもんだぞ」

男のひとりがみえの肩を抱こうとするのを、平五郎は立ちあがって止めようとした。ほかの男が足をかけて、平五郎を転倒させた。

「こいつ、本気でみえを嫁にする気なのか。源太を殺したやつが、

源太の捨てた嫁をもらおうっていうんだな」

倒れた平五郎に、嘲笑と足蹴が見舞われた。

「やめてくれ、こいつは平五郎じゃねえ、源太さんなんだ」

割って入ったみえの言葉に嘲笑が一瞬やみ、それから爆笑がおこった。

「気が狂った淫売がほしければ、くれてやる。だが売女は売女らしくしねえとな」

一人がみえを羽交はがい絞めにし、ほかの二人がみえの着物を乱暴にはぎとった。

「やめてくれ、やめてくれ」

みえは泣き叫んだ。

「おれたちみんなに見せた身体でねえか。いまさらなにが恥ずかしい」

立ちあがって止めようとする平五郎の顔面に蹴りがはいった。

鼻血をふきだしてあおむけになった平五郎を三人が囲み、これでもかといわんばかりに蹴りつけ、踏みつけた。平五郎に抵抗する力がなくなると、男たちは順番に平五郎の身体に馬乗りになって、頬を思いきり殴った。

平五郎はみえが全裸にされ、輪姦される一部始終を見た。ことがおわると、男の一人が平五郎とみえにそれぞれ唾を吐きかけ、悪乗りしたもうひとりが小便をかけた。

「また世話になるぜ」

げらげら笑いながら、男たちは川東へ帰っていった。

日が暮れようとしている。

全身を痙攣させながら自失していたみえが気をもちなおし、血と汚物にまみれて仰向けに倒れる平五郎のところへ這いよった。

「ごめんよう」

あざだらけの顔をいとおしげに両手でつかんで、みえは泣いた。

男は一度も意識を失わなかった。

蹴られ、殴られた痛みも、嫁にとろうという女を目のまえで犯さ

れ、あげく小便をかけられた屈辱もすべて、これから決して忘れることはないだろう。

さいわい、骨折はしていなかった。平五郎は立ち上がると、みえに着物をはおわせた。

川を渡り坂濠に入ると、若者が数人、待ちかまえていた。宵闇のなか、先頭に見えるのは実吉だった。

「おまえ、一体どうしたっていうんだ」

実吉が問うた。怒りと悲しみをはらんだ、別れの言葉だった。

平五郎は坂濠を追われた。

家族から縁を切られ、友人は敵になった。源太を殺した武勇は忘れられ、川東の狂った娼婦を嫁にとった恥さらしとして嘲罵ちやうばされた。村から消えることを望まれていたし、坂濠のだれもがそれを予想していたのだが、平五郎とみえは残った。

集落をへだてる川をすこしのぼった山の中に、破れた狩小屋がある。二人はそこに居をかまえた。

川東の男たちがみえの《客》としてやってきては、平五郎を気絶するまで殴りつけ、みえを犯して去っていった。やがて坂濠の男たちも、同じことをするようになった。

そんな若者衆に実吉が加わっていたことがあった。平五郎と目が合ったときには、さすがに気まずい顔をして目をそむけたが、やがて居直ったように罵声をあびせ、みえを犯した。

女を抱いた代価としていくらかの金を置いていく者もあり、二人はそれを生活の足しにした。小屋のまえを耕して畑にしようとしたが、寝ているあいだに誰かが土地に塩をまいたので、あきらめざるをえなくなった。山菜や木の実を摘んで、なんとか生きながらえた。みえは幸福そうだった。平五郎を源太さんと呼ぶのは以前と変わらなかったが、ほかの言動はいたって正常で、よき妻として夫にくした。

秋も深まったころ、みえは身ごもった。父親がだれなのか皆目わ

からないが、みえは源太との子供がようやくできたと大喜びをした。押しかけて来る男の数は減っていたが、それでもときおり数人の集団が現れた。

妊娠が明らかになったとき、平五郎は初めて、本気で男たちを追いはらおうとした。相手は数を頼みにかかってきたが、平五郎は四人の男をめちやくちやに殴り、一人の腕を折った。それからというもの、小屋にはだれも寄りつかなくなった。

冬はきびしかったが、夏の間には薪を準備していたのでなんとか乗りきれそうだった。手製の罾でイノシシを狩り、滋養とした。

雪が解けだすころ、何者かが小屋に火を放った。みえも平五郎も眠っていたところをはね起きて消火にあたったが、小屋は全焼してしまった。みえの腹はだいぶ大きくなっていた。

「どうしよう、源太さん」

女は平五郎の胸にすがって泣いた。平五郎は山にのぼることにした。

山上はまだ雪深い。身重のみえを歩きやすくするための工夫には一苦労をとったが、二人はなんとか《独鈷ノ淵^{ふち}》へやってきた。

割れた巨石のあいだから、冬も休まずこんこんと水が湧き出ている。みえは《結婚》からずっと、平五郎に淵から遠ざけられていた。「竜神さまは、おれたちを結びつけるので疲れたと言っていた。淵の底で眠るから、邪魔するなということだ」

納得は不承不承だったので、淵にやってきたときには、みえは家を失ったことも忘れてはしやいだ。

「竜神さまあ。いねえのか」

女は大声で呼ばわった。

「言っただろう。竜神さまは眠ってるんだ。あまり無理に起こすとたたきがあるぞ」

「たたきなんかあるもんか。竜神さまにそんなことできねえ。だって竜神さまは、ただの人だもの」

「えっ」

平五郎の目が点になった。

「源太さんもしかして、あの竜神さまがほんとうに竜の神様だと思つてたのか。おかしな人だなあ」

みえは楽しそうにけらけらと笑った。平五郎は啞然^{あぜん}として、妻を凝視^{ぎょうし}した。

「竜神さまは、別々に暮らすことになったわしと源太さんを、もういつかいくつつけてくれた恩人だ。わしは礼が言いたいんだ。もう、この山にはいないのか？ 源太さん、何か知ってるんでないのか？」
みえは真顔になってたずねた。

一呼吸おいてから、平五郎は告げた。

「竜神さまは、竜神さまだ。淵の底に眠ってる。いつかまた、おれたちのまえに出てくるよ」

「源太さん」

「それまで、おれたちはここで暮らそう。この近くに洞穴^{ほら}がある。そこに寝泊まりするんだ」

「わかった」

みえはしつかりうなずいた。

「赤ん坊が生まれて、春になったら」

平五郎は言葉を切った。

「春になったら。むしろ、どうするんだ？」

雪は流れて消えるだろう。新しい命の息吹を約束して。

平五郎の罪も、汚辱も、巨石の間から湧き出る清水とともに流れさるだろうか。みえの心にこりかたまっていた、いわれなき罪が消えてなくなるように。

「いや」

ひとりごとのように、平五郎はこたえた。

罪は消えない。赦されることはない。なぜなら平五郎はこれからも決して、自分を赦したりはしないから。

みえが笑っていた。平五郎も笑った。

赤ん坊が産まれたら、山を下りねばなるまい。街へ出て、生きて

いくほかはない。

ダムが計画が実行されても、山上に位置する《独鈷ノ淵^{とこ}》はダム湖のほとりに残るといふことだ。

坂濠^{さかこう}と川東^{かわひがし}、集落の恩讐は水の底に消える。竜神はこの淵の底に眠りつづける。

水の上に残るものに、美しいものなどはない。美しくなくとも、生きている。

それだけで充分だと、平五郎は思った。

(了)

七（後書き）

最後までお読みくださり、ありがとうございます。
感想などいただけましたら幸いです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3360c/>

竜神の淵・天女の淵

2009年3月24日10時00分発行